

ひとはくトピックス

1 ひとはく生物多様性 大作戦！！

2010年は国連が定める国際生物多様性年であり、10月には名古屋市で生物多様性条約の第10回締約国会議(COP10)も開催されました。これらにちなんで、ひとはくでは「ひとはく生物多様性 大作戦!!」と銘打って、生物多様性に関するさまざまな催しを実施しました。

セミナー類では、当館の多種多様な分野の研究員が、生物多様性に関連させてさまざまな話題でお話しました。とくに力を注いだのは、生物多様性の理解に不可欠な野外での自然体験を取り入れた「生物多様性体験ツアー」です。マレーシア・ボルネオ島の熱帯雨林を体験するボルネオ・ジャングル体験スクールをはじめ、沖縄・西表島で亜熱帯の動植物を満喫するツアーや、兵庫県内各地の自然を巡るツアーに至るまで、多くの人たちに野外のさまざまな自然環境のなかでの生き物との遭遇を実体験していただきました。

7月から12月まで展示特別企画「ひょうごの生物多様性－瀬戸内海 vs 日本海」を実施しました。長さ9mのナガスクジラの全身骨格、2mもあるオサガメの剥製、瀬戸内と日本海とで大きさの違うテトラポッド模型、瀬戸内側の溜池地帯の象徴としてのオニバス成葉模型など、さまざまな展示物によって、二つの海に面した兵庫県の多様な環境がはぐくむ豊かな生物多様性を紹介しました。また、研究員自ら撮影したホタルイカ漁のVTRや、坂越(瀬戸内側)と居組(日本海側)の集落の違いを比較した地形模型なども展示し、豊かな生物多様性を基盤とする多彩な景観や文化にもふれました。

特別企画会期中の10月にはいくつかの展示物を持って名古屋のCOP10会場にもでかけ、兵庫県から参加された多くの県民の皆さんに、生物多様性の世界的な盛り上がりを実感していただく機会を設けることができました。

秋には初めての試みとして、小学生から高校生までを対象に、自分で観察した生き物について画用紙1枚にまとめた「いきものかわらばん」を募集しました。どれくらいの応募があるか不安でしたが、最終的には818点もの作品が集まり、館内で全応募作品を展示しました。館長賞・研究員賞のほか、ふだん博物館に取材に来られる新聞記者の皆さんの協力により三田記者クラブ賞も設け、合計39点の作品を表彰しました。

11月に実施した恒例の「ひとはくフェスティバル」も、テーマはずばり生物多様性で、今年も多くの連携団体等によるさまざまな催しが出され、会場はおおいに賑わいました。2月には年間最後の催しである「第6回共生のひろば」を開催し、さまざまな団体や県民による生物多様性への取り組みなどを発表していただきました。

このように生物多様性大作戦の、通常とはひと味もふた味も違った催しの数々を実施しました。ちょっと難しそうな生物多様性について、理解を深めるのに一役買うことができたのではないかと思います。



ひょうごの生物多様性 瀬戸内海 vs 日本海
の展示のようす。手前はナガスクジラの全身骨格。



いきものかわらばんの展示のようす。作品
応募者が家族とともに訪れ、一緒に展示を
見る姿がよくみられた。

2 COP10 生物多様性交流フェアに出展

2010年10月11日～29日に名古屋市国際会議場(名古屋市熱田区)で、生物多様性条約第10回締結国会議(COP10)が開催されました。国際会議場内でのサイドイベントや会議場のとなりの白鳥公園での展示(「生物多様性交流フェア」)は、各国政府はもとより、地方自治体、NGO、学会などが生物多様性に関係する団体が企画・開催できるものでした。

生物多様性に関する先進的な取り組みを進めている兵庫県も当然に参加の方向になりました。他部局と調整して、交流フェアでの展示は「ひとはく」が主に行うこととなりました。

多様性フェアには10/18～29の12日間で参加しました。約200の団体で、ただ一つ「博物館」でした。COP10タスクフォースのメンバーなど15名の館員の他、自主的に見学に来る館員もありました。兵庫県自然環境課、ひょうご環境創造協会、APNセンター、コウノトリの郷公園のみなさんにも協力いただきました。

10平米のテント2つ分の狭い空間でしたが、巨大オオクワガタ(長さ1.2mの革製)はきわめてよいアイキャッチになり、テレビカメラまでが寄って来ました。こうした昆虫が育つ兵庫県の里山にも関心を示してもらいました。兵庫県内の行政、市民団体などの取り組みもパネルや冊子で紹介しました。中でも、リアルなキノコ標本が並んだ「六甲山のキノコ展」(御影高校)は人気でした。さらには六甲アイランド高校など8団体の方々も展示物をもってきて説明してくれました。

名古屋まででかけてきた兵庫県民向けに毎日「COP10ガイドツアー」を開いて、担当研究員が会



写真1:生物多様性フェア会場。左奥が名古屋市国際会議場。

場内のあちこちのブースを案内しました。土日に行った岩槻館長のガイドツアーは特に参加者に好評でした。名古屋の生物多様性を知る意味で、名古屋城のヒメボタル、守山区東谷山のシダの観察会も行いました。

他府県の自然環境担当者や企業の環境担当者の中には、「こんな博物館があるといいですね」という方も多く、20周年を迎える「ひとはく」の意義を県外に広げるよい機会になりました。

国際会議場。



写真2:ひとはくのブース。となりのブースのお姉さんも来てくれました。



写真3:岩槻館長のガイドツアーに集まった人々。

3 共生のひろば、ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま

生物多様性条約締約国会議(COP10) が日本で開催された年、兵庫県における生物多様性の取り組みの輪の大きさが実感できる、2つの事業がありました。

一つ目は、県下でふるさとの生き物、自然、環境、文化など幅広く生物多様性にかかわる事業に取り組む市民団体やNPO、企業、公共施設141団体を紹介する冊子「ひょうごのいきもの・ふるさとを見守るなかま」を編纂したことです。この冊子には、「寄稿団体同士だけでなく、兵庫県や近隣府県で活動する既存団体や新たに活動をはじめの人々との交流も活発となつてほしい」、「新しい活動が生まれるとともに、従来の活動内容が充実して、生物多様性の取り組みの輪がますます広がるように」との願いがこもっています。COP10 会場でも本冊子を配布し、他府県の方々にも注目されました。本冊子は当館にて配布しているほか、HP にも掲載しています(<http://hitohaku.jp/publications/book.html#nakama>)。

二つ目は、第6回目を迎えた「共生のひろば」です。従来は、市民・学校団体や個人の発表者が大半でしたが、今回は家族ぐるみでの野生動物観察、中学生と高校生のコラボレーションや企業の所有地にお



ける生物多様性の取り組みといったこれまでにない発表も加わり、新たな輪の広がりを実感できる会となりました。上記冊子の寄稿団体も新たに加わり、合計 52 件の発表が集まりました。発表会当日の2月11日は、前日夜より降り続いた大雪・積雪で交通の便が悪い状況にもかかわらず、271名の聴講者が参加。各々が持ち寄った、生き物にまつわる話題や展示物を囲んで、真冬の寒気も吹き飛ぶ熱気に包まれ、活発な交流が行われました。

これからも生物多様性の保全と持続可能な利用に関する連携の輪がますます広がるよう、ひとはくも活動を展開してまいります。



4 生態系レッドデータブックや市町版多様性戦略への参画

過去も現在も未来も、私たち人類の安全・安心・快適な生活は生物多様性のめぐみを受けることなくしては存在し得ません。昨年名古屋で開かれた COP10 生物多様性国際会議はこのことを全世界の人々が認識し、生物多様性の危機にどう対処するのかを、具体的な目標値を決めて推進するための会議でした。「愛知ターゲット（名古屋議定書）」では、2010 年以降 2020 年までの中期目標は「生物多様性の損失を食い止めるため効果的かつ緊急に行動をとる」とし、数値目標は陸域の 17%、海域の 10%を保護区域に指定することとしました。

兵庫県から新たな絶滅種を出さないことが生物多様性を保全する第一歩ですが、1997 年の兵庫のレッドデータブック記載のランクAの種は動物 51 種・植物 233 種であったのに、わずか 6 年後の 2003 年には動物 118 種・植物 285 種と動物では倍増してしまいました。絶滅危惧種を救う、また普通種を含む多様な生物多様性の保全効果をあげるには、ある程度の広がりを持った複数の小生態系を包含する生態系全体を保全すべきだとの考えから、兵庫県ではこれまで制定してきた動物・植物・植物群落・地形地質自然景観に加えて、2010 年度に全国の府県に先駆けて生態系レッドデータ制定の作業が始まりました。

絶滅危惧種を含む多様な生物がすむ湿地やため池とその周辺の里山を含む生態系として「いなみの台地のため池群」「加西市のため池群」、また河川の下流域から干潟にかけては、魚類・カニ・巻貝・海浜性植物など多



写真 1. 千種側下流

岐に渡る分類群で多様な生態系で、「円山川河口域」「千種川河口・下流域」「揖保川河口・下流域」「加古川河口・下流域」などが生態系レッドリスト A ランクとしてリストアップされています。また氷ノ山や扇ノ山も森と溪流を一体的に捉えて生態系としての指定を試みています。これらレッドデータブックや生物多様性兵庫戦略の策定には、博物館員がその委員また委員長として深く関与し博物館のシンクタンク機能を発揮しています。



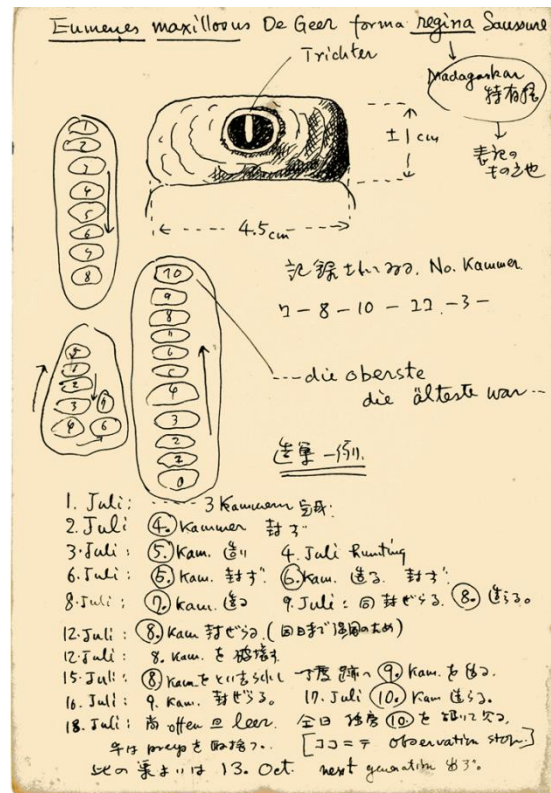
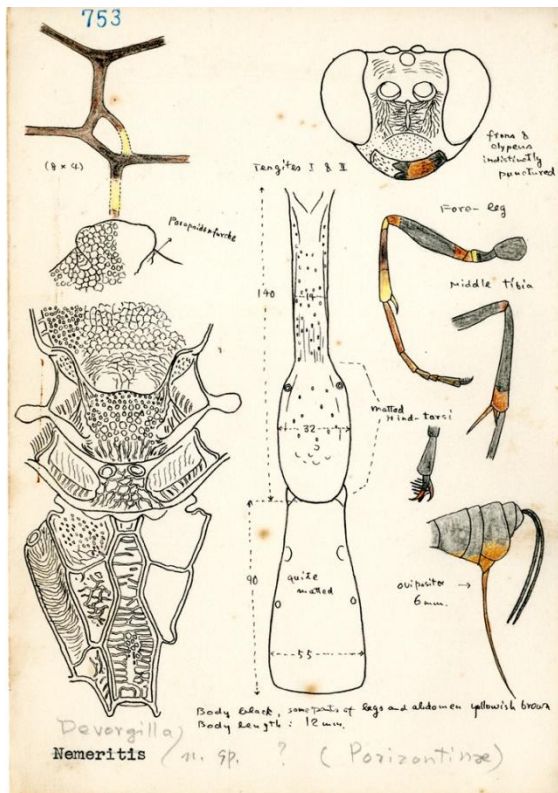
写真 2. 氷ノ山



写真 3. 扇ノ山・岸和田源流

5 岩田久二雄博士の研究ノート画像

日本のファールと呼ばれる岩田博士が研究した 1,500 種のカリバチ類の行動を記録したノート942項と、ヒメバチ370種の形態を詳細なイラストで1種ごとに記録したノート370項をデジタルスキャンし、ひとはくの資料データベースに登録、ホームページ上で一般に公開した (<http://hitohaku.jp/webmuseum/>)。前者のノートは著書「本能の進化」執筆のために制作されたものである。個々のカリバチの習性を営巣・産卵・獲物の処理・獲物の運搬などの要素に分けて記述し、巣の構造や獲物のイラストなども付け加えている。後者は、博士が晩年、カリバチの本能進化の起源を明らかにするために、その祖先にあたる寄生バチに取り組んだ研究ノートであったが、その成果はほとんど発表されなかった。研究ノート類は、研究者の死後、散失してしまうことが普通で、保存・公開されることは非常に稀なことである。しかし、すぐれた自然観察眼をもつナチュラリストの研究ノートは、一般の人々にとっても、どのように自然に向かい合い、そのおもしろさを引き出していくのかを垣間みることができる資料としての価値をもっている。ひとはくでは、岩田博士と同じく日本のファールと呼ばれる坂上昭二や常木勝次博士の研究ノートやフィールドノートを収蔵しており、これからも順次公開していく予定である。これらのデジタルアーカイブ資料が未来のファール誕生の切っ掛けになれば幸いである。



6 甲虫のホロタイプが今年度で 100 個体

博物館所蔵の鞘翅目(コウチュウ目)のホロタイプ(担名タイプ)が 2010 年度で 100 件に到達した。資料収集活動にご協力くださる皆様に御礼申し上げ、今後も変わらぬご愛顧と収蔵資料の活用をお願いする次第である。

標本の来歴はさまざまである。甲虫ジェネラルコレクションの基礎となっている大倉コレクション(受入番号:1995-0036)にもその一部として石田裕氏らによるナガゴミムシ類のホロタイプ 9 件がある。ロシアの森林昆虫のママエフ・コレクション(1993-0040)はタマバエが主体だが、甲虫のホロタイプも 6 件含まれている。展示用に購入した江田コレクション(2001-0035)にはその一部として戦前にハナカミキリを研究された玉貫光一氏のコレクションが含まれている。これに 25 件、他に 2 件のホロタイプが含まれている。

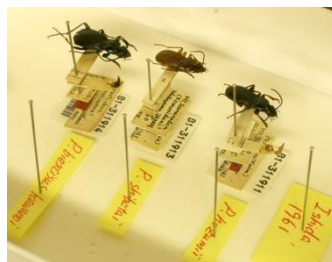
開館以来、証拠標本をその都度、館に委ねて下さる研究者は少なくない。ただ”甲虫のホロタイプを含む寄贈”に限定すると三名になり、コガネムシ類の伊藤武氏の 9 件、クワガタムシ科の荒谷邦雄氏の 1 件、ハネカクシ上科等の保科英人氏の(2010 年度に 3 件追加され)46 件が該当する。

以上を合計すると 98 件。このほかに、未登録の日本生命コレクション(2001-0034)の稲原延夫コレクションのクワガタムシ科に 3 個体のホロタイプが存在する。これを加えると 100 件を越える。

どれが 100 番目かは微妙である。2010 年は画期的なクワガタ図鑑が刊行され、上記の 3 個体も参照された。クワガタでさえ世界的にはまだ新属新種が見出されている。一方で、保科氏の寄贈標本は概して小型である。2mm に満たない微小な未記載種が国内にも多数生息していると考えられ、今まさに命名記載されつつある。活発な甲虫研究を象徴する同着タイの 100 件達成である。

既に 200 件への歩みは始まっている。貸し出した結果、ホロタイプになって返却される予定の 1 個体があり、これは 102 号。現在のところレクトタイプはないが、シントタイプの一つと考えられる個体が幾組もあり、今後これらの中からレクトタイプが指定される可能性がある。200 件はレクトタイプ数やネオタイプ数を含めた値で通過することになるだろう。

これらのホロタイプは、場合によってはパラタイプとともに、分類群と命名者に基づいてドイツ箱にまとめ、および他の重要な証拠標本を収めた箱とともに通常は専用の収蔵棚(耐火金庫)に収納してある。



コガネムシ科を収容しているドイツ箱とナガゴミムシ類のホロタイプ(三番目はパラタイプ)



Eustrangalis albicornis, トシイエウスゲガムシ, マツクシヒゲヒメコケムシのホロタイプ

7 月例報告会通算100回を超える

ひととはくでは、毎月第2金曜日の朝9時30分から「月例報告会」を実施しています(写真は月例報告会のようす)。この報告会は、各課・室の長が各3分程度で前月のデータをもとに、中期目標に掲げられた指標や各事業の進捗状況を報告する全体会です。参加者は、館長、副館長、次長、館長補佐をはじめ、多くの職員が参加しています(出席率は毎回80%前後)。「研究・シンクタンク推進室」の報告から最後の「館長コメント」まで、全体が約30分で構成されているので、各課・室長のコメントの一部は、あらかじめ資料に掲載されています。中期目標に掲げられた指標については、その進捗や達成状況が報告されますが、主に前月の状況と対策が中心となります。資料は、前年の同月との比較ができるようになっているり、グラフ化して見やすくしているものもあります。

この報告会は、平成14年からスタートして平成22年度で通算100回を超えました。

平成14年の5月10日の資料をみると、「基本的な書式で対応して、館内に掲示(総務課入口付近)



の予定」、「月例会議では資料を配布して、重要な点を報告する」など、月例報告の様式について説明が行われていた記述があります。このように当時の資料から手探りで行っていたことが伺えます。約9年間経過した現在では、報告等もスムーズに行われ、予定時間よりも早く終了することもあります。



8 博物館と幼稚園・保育園フォーラム

2008年3月に策定した、新たな「人と自然の博物館基本計画」はソフト先行で着々と進行しています。基本計画では、「演示」(人の介在する事業手法)をコンセプトに次世代育成支援機能を新たに追加することとし、幼児に対する学習支援が重要な課題となっていました。園児たちに、館のスタッフや園の指導者、協力者を介して館内外でさまざまな体験を提供できるよう、ひとはくは進化していきたい。そう考えています。

そのためには、指導者、保護者の方々が、これまでのひとはくを利用してどうだったのか、どんな課題があるか、直接におききすることが必要でした。そこで実際の利用経験者や専門家を招聘し、2011年1月30日(日)13:00～16:00、「博物館と幼稚園・保育園フォーラム」を開催しました。

まず、フロアスタッフから当館の利用者の状況とワークショップなどについて報告がありました。ひとはくの利用者の10%が幼稚園児であるとの報告を受けました。つぎに、北摂第一幼稚園、キッズポート保育園、みこころ幼稚園親子学級の方から、利用例をレポートいただきました。最後に、専門館であるキッズプラザ大阪の石川梨絵さんから、キッズプラザのコンセプトや「ハンズオン」を主体とした事業内容をご紹介します。

フリーターキングでは、館内の上下移動には事実上階段しか使えず体力的に厳しいという、ひとはくの構造上の課題、子ども本来の姿と相容れない展示室の雰囲気(静かに観覧しないと怒られそう)など、今後の展開を考える上でのいろいろな課題が発見されました。また、園児は剥製が動かないことを不思議に思うなど、展示資料に対する見方も、考えさせられました。

ひとはくでは、フォーラムの成果も活かし、2011年度からは事業推進部門に「キッズひとはく推進室」を設けることとなりました。今後にご期待ください。



9 恐竜・化石プロジェクト、今年度も新発見が相次ぐ

恐竜・化石プロジェクトは、今年度も多くの話題を提供しました。

今年度はまず、5月20日に人と自然の博物館、丹波県民局、篠山市、丹波市、(財)兵庫丹波の森協会、たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会の6者が互いに恐竜化石等を活かしたまちづくりを推進するため、「篠山層群における恐竜、哺乳類化石等に関する基本協定」を締結しました。この協定にもとづき、県と市および関係機関が密接に連携し、地域が一体となって篠山層群の恐竜化石等を活かした戦略的・広域的なまちづくりに取り組み、交流人口の拡大と地域活性化を推進することとなりました。一方、調査研究では2010年度も新発見が相次ぎ、以下について記者発表を行いました。とりわけ、2011年1月7日発表の「曲竜類(鎧竜類)の歯化石の発見」では、発見者である篠山市在住の小学生が記者会見の場に同席し、その発見は全国的な話題となりました。



1) 丹波市恐竜発掘におけるカエル類の全身骨格化石の発見(8月5日、記者発表)

当館のクリーニング技術員が、ひとはく恐竜ラボで第2次発掘調査時に取り出された岩塊をクリーニング処理する過程で、一部に小動物化石が密集した部分を見つけました。それらのクリーニングを進めたところ、カエル類の全身骨格の化石2点を発見しました。これまでに日本で発見された前期白亜紀のカエル類化石としては3例目で、全身骨格がほぼ完全な状態で保存された化石の発見は日本で初めてのことです。



2) 曲竜類(鎧竜)の歯の化石の発見について(2011年1月7日、記者発表)

2010年10月、篠山市主催の体験発掘会に参加した小学生が発見し、その後、ひとはく恐竜ラボでクリーニングした結果、曲竜類(鎧竜)の歯の化石と判明しました。前期白亜紀の地層から曲竜類の歯の化石が見つかったのは今回が初めてです。発見者の田中くんも記者会見に臨み、報道関係者に取り囲まれながら質問に応じました。



3) 5次発掘調査報告、テリジノサウルスの歯化石の発見(2011年3月30日、記者発表)

第5次恐竜化石発掘調査を2010年12月11日(土)から2011年2月20日(日)まで行いました。今回の調査では、竜脚類(丹波竜)の未発見部位(胴椎椎体)が産出するとともに、獣脚類のテリジノサウルス類の歯が初めて発見されました。記者発表にはテリジノサウルスの歯を発見した発掘ボランティアの酒井さんも同席し、記者からの質問に応じました。



10 山陰海岸が世界ジオパークに認定。期待されるひとはく役割

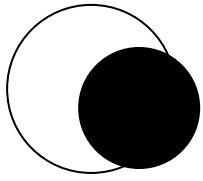
平成 22 年 10 月、山陰海岸ジオパークが日本で 4 番目の世界ジオパークに認定されました。ジオパークは、地質や地形などの景観とその上に成り立つ生き物や人の活動、歴史・文化などを主な見どころとする公園で、観光を中心とする経済活動や生涯学習活動などを通して地域が活性化することを目的としています。

ひとはくは平成 21 年度から山陰海岸ジオパークの学術部会委員に 2 名の研究員を派遣するとともに、ジオパークタスクフォースを立ち上げ、館あげでの協力体制をとってきました。ジオパーク活動の基本は、地域の人たちがそれぞれの地域のことを知って、地域を誇りに思うことで、それを進めるにはひとはくが実施しているような生涯学習を進めていくことが大切です。山陰海岸ジオパークは鳥取県の鳥取市東部・岩美町、兵庫県の新温泉町・香美町・豊岡市、京都府の京丹後市を含む、日本で一番広いジオパークです。ジオパークの活動ではそれぞれの市町や府県が独自に動くのではなく、一つのジオパークとしての活動が望まれ、ジオパークで活動している人たちの連携が求められています。生涯学習を通じて地域で活躍している人たちの発掘し、連携した活動を支援するのは地域に根ざした博物館の持つ大きな役割であり、このことを実践してきたひとはくに対する地元からの期待は大きくなりつつあります。ひとはくでは次年度以降、山陰海岸ジオパーク内でのセミナーやキャラバンなどの活動に、これまで以上力を注いでいく予定です。



写真 3. 世界ジオパーク委員による視察

審査委員への説明は、普段ガイドをしている人たちがします。



平成 22 年度のタスクフォース事業報告

タスクフォース(組織群)について

従来の組織群とは別に平成 20 年度から導入したものである。各タスクフォースは、短期の課題を達成するために結成したものである。構成員は、リーダーおよびサブリーダー、その他であり、人員は、実情に応じて年度途中でも変更可能にしている。また、新たなタスクフォースを発足できるようにしている。平成 22 年度は 5 つのタスクフォース(生物多様性戦略、恐竜・化石、マーケティング、ジオ・パーク、COP10 推進)が結成された。

■ 生物多様性 タスクフォース

(1) 生物多様性についての普及活動および県・市町・企業に対するシンクタンク活動

・兵庫県下の市長(神戸市、明石市、西宮市など)の戦略策定または戦略策定に向けた活動を支援した。また、森づくりセンターに参画し、企業の生物多様性への取り組みを支援した。

(2) 委員として RDB 改訂作業等への参画

・ひとはくの多数の研究員が、ひょうご戦略の推進に関わる委員会に参画した。

兵庫県下の市町(神戸市、明石市、西宮市など)の戦略策定または戦略策定に向けた活動を支援したことで、今年度の目標は達成できた。市民グループの活動地における生物多様性戦略の実例を示すことができたことにより、次年度以降の活動にある程度の道筋をつけることはできた。ひょうご戦略の推進については、県自然環境課との連携を密にして実施している。ネットワークの形成については、市民グループの意見も集約しつつ慎重にすすめる必要がある。市民グループ版の生物多様性戦略策定に協力した。今後さらに支援活動を活発にしたい。

■ 恐竜・化石 タスクフォース

(1) 第 5 次発掘調査の実施

・平成 22 年 12 月 11 日～平成 23 年 2 月 20 日に実施。発掘ボランティアの参加人数は、のべ 466 人(登録は 57 名)であった。また、平成 23 年度以降の調査方針についても検討した。

(2) 化石クリーニング作業、および調査研究の推進

・日本古生物学会 2010 年年会(平成 22 年 6 月)において、発掘された竜脚類が新属新種であることを発表した。また、発掘結果に基づき論文を 2 報公表し、第 4 次発掘調査およびこれまでの取り組みをまとめた中間報告書も作成した。

(3) 国際シンポジウムに向けた準備

・国際シンポジウムに向けた準備の一環として、丹波市において「地才地創シンポジウム in 丹波」(平成 22 年 12 月 4 日)と「恐竜・子ども夢フォーラム」(平成 22 年 12 月 5 日)を共同開催した。

(4) 恐竜化石を活かした教育普及活動の充実

・当館、丹波市、篠山市、丹波県民局、(財)兵庫丹波の森協会、たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会の 6 者による「篠山層群における恐竜・哺乳類等化石に関する基本協定」を締結し(平成 22 年 5 月 20 日)、地域連携をさらに強化した。

・神戸市のチョコレート会社・㈱マキイズと地元高校生との協働による、恐竜化石等を素材にしたチョコレート商品の開発を支援した。次年度も継続して取り組む予定である。

(5) 展示および演習コンテンツの充実

・(株)マキイズと連携し、夏休み特別セミナーとして「チョコレートを用いた化石のレプリカづくり」を開催した。その後、当館でのオープンセミナーにおいて、同プログラムを提供する体制を整え、実施した。

(6) 三田の化石発掘体験広場の活用

・トライやるウィーク(平成 22 年 6 月)およびセミナー(平成 22 年 11 月)にて三田の化石発掘体験広場を活用した。

(7) 研究成果や事業の新聞等への報道推進

- ・「丹波と恐竜を知らう 2010ー第 4 次発掘報告」について(平成 22 年 4 月 8 日、資料配付)
- ・恐竜・哺乳類化石等に伴う基本協定および恐竜・哺乳類化石等に伴う連携・協力に関する覚書締結調印式について(平成 22 年 5 月 18 日、資料配付)
- ・丹波市恐竜発掘におけるカエル類の全身骨格化石の発見(平成 22 年 8 月 5 日)
- ・第 5 次発掘調査の開始(平成 22 年 11 月 10 日、発掘現場)
- ・曲竜類(鎧竜)の歯の化石の発見について(平成 23 年 1 月 7 日)
- ・第 5 次発掘調査の状況について(平成 23 年 1 月 8 日、発掘現場)
- ・第 5 次発掘調査の状況について(平成 23 年 2 月 15 日、発掘現場)
- ・第 5 次発掘調査の結果報告およびデリジノサウルスの歯化石の発見について(平成 23 年 3 月 30 日、当館)

以上のように、今年度の重点事業をほぼ当初の計画どおりに実行した。また、そのことにより次年度以降の活動にもつながる成果を得ることができた。

■ マーケティング タスクフォース

(1) ひととはく事業実施に関わる企業との連携

・広告協賛団体が新たに 8 団体加わった。

(2) 外部資金を活用したひととはく手帖広告協賛の募集による印刷資金調達

・65 団体からの協賛により目標額を上回ることができた。

昨今の社会・経済状況から当初の目標達成は難しいと予想されたが、館員諸氏の尽力により、昨年度並みの額に達し、目標を達成することができた。募集要項の雛形を基にして、臨機応変に事業を進めたが、タイムスケジュール通りにスムーズに進行したとは必ずしもいえない。今後の改善点としては、募集様式の再吟味、原稿と協賛金銀行振り込みの締め切り期日を早めることなどがあげられる。また、団体・企業への広告協賛募集の呼びかけの範囲を館としてどのように考えるか検討する必要がある。

■ ジオ・パーク タスクフォース

(1) 山陰海岸世界ジオパーク認定への支援

・平成 22 年 10 月 4 日に世界ジオパークに認定された。

(2) 山陰海岸ジオパークの運営支援

・共催 5 件(ジオパーク推進協議会、但馬国分寺館、鳥取県立博物館) (←月齢報告会の資料では、左記の内容のみが記載されて
いました)

(3) 山陰海岸ジオパークにかかわる、ひとはくの活動を実施

・山陰海岸ジオキャラバン(岩美町)において1件、山陰海岸ジオキャラバン(京丹後市)において2件、但馬国分寺館において3件、ジオパークフェスティバルにおいて3件、ひとはくセミナー(山陰海岸)において6件、合計14件のアウトリーチ・プログラムを実施した。

前年度落選した「世界ジオパーク申請候補」に再度申請し、日本代表に認定された。また、運営に関する委員やガイド養成などの講師として参画し、地域への支援を継続している。ジオパーク内における活動は地域主体で、「縁の下の力持ち」的な活動が多く、「ひとはくの活動」として一般市民に浸透するには至っていない。

世界ジオパーク認定に向けて、県民局と協力するとともに、今後はガイド養成などの世界認定への取り組みだけではなく、その後をにらんだ定常的なセミナー、キャラバンなどを開催していく。ジオ環境研究部門(≡ひとはく)主催の定常的なセミナーやキャラバンを実施し、世界認定後をにらんだ活動を展開していく。ひとはく手帖掲載のセミナー類を、ジオパーク推進協議会と共催で実施する。

■ COP10推進 タスクフォース

(1) 生物多様性 COP10 交流フェアへの参加

・平成22年10月18日～29日(12日間)に、名古屋市熱田区白鳥公園で、開催された生物多様性フェアに参加した。ひとはくの生物多様性への取り組み、里山の保全などについて展示した。ほかに、兵庫県自然環境課、ひょうご環境創造協会、APN センター、コウノトリの郷公園による展示、県立御影高校の「六甲山のキノコ」展示もブース内で行った。

・多くの県内団体が活動のアピールをできるように、1日展示の参加を募り、8団体が参加した。

・会期中の毎日、来訪した兵庫県民向けに「COP10 ガイドツアー」で、担当研究員は、多様性交流フェアの他ブースの案内をした。

・名古屋周辺の生物多様性にふれる機会として、名古屋城のヒメボタル、東谷山(名古屋市守山区)のシダ植物の観察会を開催した。

(2) 生物多様性 COP10 サイドイベント・フォーラムへの協力

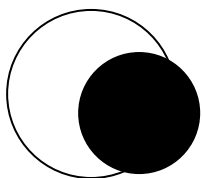
・兵庫県自然環境課やひょうご環境創造協会が行ったサイドイベント(COP10会場内)やフォーラム(名古屋学院大学)で、関連した内容の研究員を派遣した。

(3) 県内での生物多様性関連イベントへの参加

・平成22年9月9日に兵庫県公館で開催されたフォーラム『いのちが共生する兵庫を私たちの手で未来へ～生物多様性を考えるNGO・NPO、市民のHyogo対話～』(ひょうご環境創造協会主催)でブース展示を行った。

(4) COP10半年前イベントへの出展

・環境省中部地方事務所と連携して、平成22年5月21日～22日にオアシス21(名古屋市東区)に出展した。



平成 22 年度事業報告

人と自然の博物館では、その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標は、いわば博物館の行動の指針となる大項目であり、これが全部で 9 項目設けられており、それぞれに達成を目指すべき目標値(指標)が設定されている。そして、この中期目標の各項目の下位項目として「措置」が設定されている。措置では、中期目標の達成と博物館活動の活性化に資する具体的な項目について、その行動の方針と、具体的な数値目標が設定されている。

次ページ以降の図表および解説は、中期目標の各項目に即して、平成 22 年度の博物館の活動内容とその自己評価、および平成 23 年度の事業方針を整理したものである。また、中期目標を支える措置の項目については、それぞれについての目標値・実績・達成度(%)を示した。

なお、平成 19 年度に中期目標と指標、および措置について、平成 14 年度から平成 18 年度の活動成果をふまえて、さらに社会のニーズへの対応を考慮して修正を行った。平成 22 年度は、平成 20-21 年度の実績や達成状況、博物館の将来構想を吟味したうえで中期目標と措置の最終案を設定し、それに従って事業を進めた。

1 研究

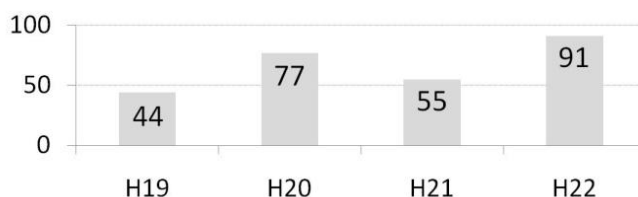
研究・
シンクタンク
推進室

兵庫から世界を対象に自然・環境に関する調査研究を行い、その成果を新しいプログラムやコンテンツ開発等の事業にフィードバックさせます。

1-1 学術論文数

学会等の査読を経て掲載された学術論文数

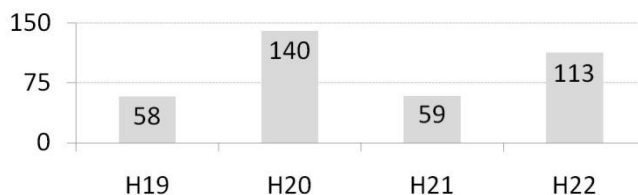
中期目標：40本/年
平成22年度：91本(228%)



1-2 一般向け著書数(総説・その他)

自費出版を除く一般向け著書、雑誌・新聞等の執筆数

中期目標：80本/年
平成22年度：113本(141%)



平成22年度の取組みについて

全ての博物館活動の基礎となる「自然・環境」また「人と自然の共生」に関する研究を進め、その成果について研究員あたり最低年間1報を学会誌等で発表し、さらに一般市民向けの著書・新聞・雑誌等でもそのエッセンスを積極的に公表することを目標に掲げました。

平成22年度の達成状況と自己評価

学術論文の公表数は、目標値を大きく上回り第2期中期目標期間中で最多の91報に達しました。一般向け著書等は、本年度の目標値を上回る113報に達することができました。学術論文・一般向け著書数ともに、研究員による偏りがあり、最低限の目標が全ての研究員において達成されたわけではありませんでした。

平成23年度の取組に向けて

最低限の学術論文また一般向け著書の公表が、博物館の総体として、また個々の全ての研究員においても達成されるよう努力を重ねることが肝要です。より多くの研究成果をあげるため、助成金の獲得にむけた勉強会の開催・情報の共有を推進します。また、「総合共同研究」などの研究部横断的な課題にも積極的に取り組み、多様な研究成果をあげることに努力します。

2 資料

研究・
シンクタンク
推進室

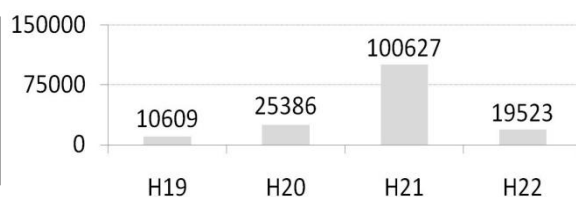
質の高い特色ある資料の収集を行い、学術利用のみならず「演示」への利用を積極的に推進します。

2-1 資料の登録点数

「ひとく資料データベース」への年間登録件数

中期目標：10,000 点/年

平成 22 年度：19,523 点(195%)

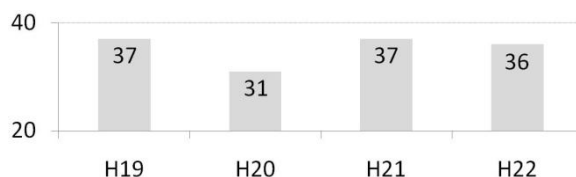


2-2 資料の利活用件数

資料の館外利用件数(貸出資料件数・館外展示件数)とマルチメディアデータ等の提供件数の合計

中期目標：50 件/年

平成 22 年度：36 件(72%)



平成 22 年度の実施について

収蔵資料および環境情報の収集・保存・利活用のシステム整備を行いました。資料収集方針に従った研究員自らの資料収集、県内外の自然史資料の受贈手続きを積極的に推し進めました。これらの資料や情報は利活用されて初めてその意義を発揮することから、登録件数だけでなく公開件数やその利活用の件数もその目標にあげました。

平成 22 年度の達成状況と自己評価

収蔵資料の登録点数は平成 21 年度の値を下回ったものの、本年度の目標を大きく上回り 19,523 万点に達しました。登録資料の一部は、館 HP の他サイエンスミュージアムネットや地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) にもデータを登録し、全世界で閲覧・利用されています。また、甲虫類のホロタイプの登録点数が 100 点を超え、学術価値の高い標本を更に充実することができました。博物館資料の貸し出し件数・館外展示・情報の貸し出し件数などの「利活用件数」は目標の 72% (36 件) と、普及教育用の「演示」への活用は前年度(74%)とほぼ同じでした。

平成 23 年度の実施に向けて

資料の収集・受贈・整理登録は、分野に偏ることなく継続します。博物館資料・環境情報の利活用件数を増やすため、情報のインターネットによる公開や、県民や専門家にとって魅力的なコレクションの充実を図ります。一方で、演示をはじめとする環境学習などに有用な教材となる「資料」の整備を進めます。また地域住民や行政にとって有用な資料・情報が利用されるように「広報」をはじめ「利用の仕組み」を整備します。

3 生涯学習の支援

生涯学習課

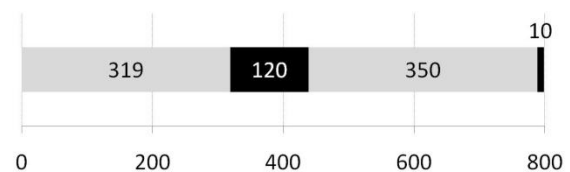
段階的・連続的な学習プログラムを提供し、地域研究員・連携活動グループを育成します。これらの「担い手」や他団体との連携を促進し、博物館事業の拡大を図ります。

3-3 地域研究員・連携活動グループ登録者数

地域研究員と連携活動グループ登録者数の合計

中期目標：500人(H23時点)

平成22年度：799人(160%)

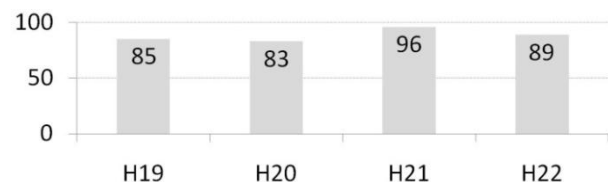


3-4 他団体との連携プログラム数

共催事業、協力事業、後援事業、館外展示件数の合計(地域研究員・連携活動グループによるものを含む)

中期目標：100件/年

平成22年度：89件(86%)



平成22年度の取組みについて

共生のひろば等の通常事業に加えて、生物多様性大作戦！の一環として COP10 会場への出展、冊子「いきものふるさとをみまもるなかま」の出版、学校の児童・生徒による参加型展示「いきものかわらばん」等の新しい試みにより、日頃から関係のある地域研究員等の市民、連携活動グループ等の団体、他施設、企業などに呼びかけ、生物多様性の幅広い普及と深化をめざしました。また、県内6地域に地域担当を置いて関係部局・諸施設等との接触を図り、アウトリーチ活動拠点づくりを始めました。

平成22年度の達成状況と自己評価

「第6回共生のひろば」には、52件の発表があり、発表者と聴講者合わせて270名の参加がありました。COP10出展ではガイドツアーに69名、関連セミナーに22名、ブースに県内10団体が出展参加するなど盛況で、合計1万人余りのビジターがありました。冊子「いきものふるさとをみまもるなかま」には140団体から寄稿が得られました。「いきものかわらばん」には県内外から818点の作品が集まりました。これらを含め他団体との連携プログラム数は共催55件、協力22件、後援3件、館外展示9件と数的にはふつうですが、活動内容は広がっています。

平成23年度の取組に向けて

生涯学習推進室から、地域展開推進室とキッズひとく推進室を新規に分け、新体制で多様なステークホルダーに対して多様な事業を展開できるよう進めていきます。とくに地域での活動拠点づくりと担い手の育成に力を注いでいきます。

4 シンクタンク活動の支援

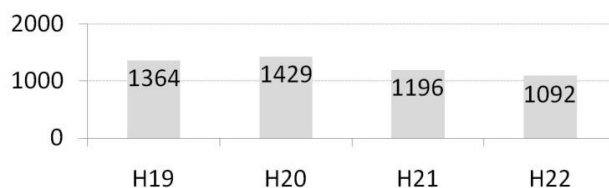
研究・
シンクタンク
推進室

自然・環境に関する県政課題に対して、適切な助言や提言等を行います。また、企業や行政団体等のニーズに応え、先駆的な調査研究を積極的に受託します。

4-1 県政・市町行政に対する貢献度

国・県・市町関連の委員会及びプロジェクト参画数

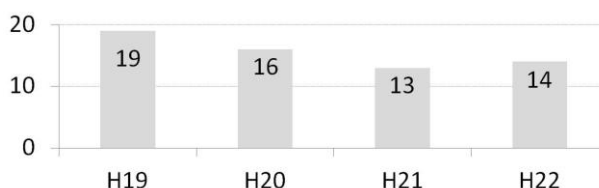
中期目標：1,000 件/年
平成 22 年度：1,092 件(109%)



4-2 受託研究件数

調査研究受託契約件数

中期目標：15 件/年
平成 22 年度：17 件(113%)



平成 22 年度の取組みについて

県・市また国関連部局の委員会・審議会等への学識経験者としての参画を進めました。県職員等の来館相談目標数を 1,000 件に設定しました。また、関連部局・施設、また企業とともに地域の問題を解決する受託研究の目標獲得件数を 15 件に設定しました。

平成 22 年度の達成状況と自己評価

博物館研究員の県政関連の委員会・審議会等への学識経験者としての参画数は 307 件にのぼり、それに関連して博物館に来訪する県職員等関係者の来館は 1,092 名で目標を達成しました。受託研究はここ数年漸減傾向でしたが、22 年度は 14 件の横ばいで目標を僅かに下回りました。受託研究金総額は 1,230 万円に達し、平成 21 年度の総額 939 万円を上回りましたが目標に達しませんでした。

平成 23 年度の取組に向けて

博物館のシンクタンク活動が行政施策また県民の活動に生かされ得る第一段階は達成していますが、実際の県政また地域の課題解決にさらに有効に作用させる必要があります。COP10 で採択された目標に沿って、生物多様性兵庫戦略の地域での具体的な活動を推進すること、その財政基盤の確保として受託研究の獲得目標を前年度どおりの 15 件、総額を 1,500 万円とします。

5 マーケティング・マネジメント

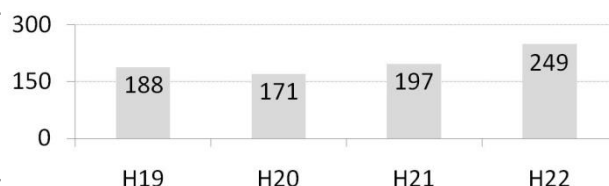
企画調整室

情報化社会に対応した情報提供を拡大し、広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を高めます。

5-1 ホームページアクセス件数

ホームページに対するアクセス件数

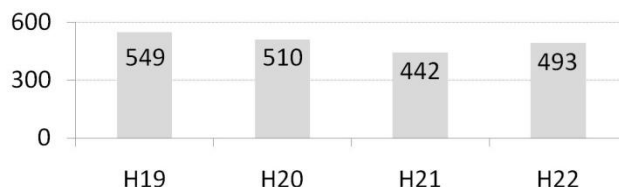
中期目標：300 千件/年
平成 22 年度：249 千件(83%)



5-2 メディア等出演件数

新聞・雑誌等記事掲載件数、テレビ・ラジオ等への出演件数の合計

中期目標：500 回/年
平成 22 年度：493 回(99%)



平成 22 年度の取組みについて

平成 22 年は国際生物多様性年でした。そこで今年度は「ひとはく生物多様性大作戦！」と称して、各事業を「生物多様性」をテーマに実施しました。ホームページは、更新回数を増やすこと等によって、皆さんに博物館の存在を知っていただくよう（知名度の向上）に努力しました。

平成 22 年度の達成状況と自己評価

今年度は「生物多様性」に関連した展示特別企画、イベント、セミナーや体験型ツアーを行うなど、各種メディアに取り上げていただける事業を実施したり、名古屋で開催された COP10（生物多様性条約締結国会議）の隣接会場へ出展にも参加しました。また昨年度に引き続き「恐竜化石」に関する新しい発見などで、新聞やテレビで報道され、メディア等への出演件数はほぼ目標値に達しました。これらのことで知名度は確実に上がっていると思われます。一方、ホームページの更新回数を増やすことで前年度よりもアクセス件数が増えましたが、目標には到達しませんでした。

平成 23 年度の取組に向けて

平成 22 年 10 月に山陰海岸ジオパークが世界ジオパークに認定されました。そこで来年度のテーマを「ジオパークで学ぼう」とし、ジオパークに関連する事業を展開したいと考えています。一方で、引き続き「恐竜化石」に関する事業を展開し、知名度の向上をはかりたいと考えています。また、事業推進部門に地域展開推進室やキッズひとはく推進室を新たに設置し、地域展開や小さな子ども向けのプログラム開発などに力を入れたいと考えています。事業の報告などをホームページの「ひとはくブログ」（館員からの情報）などで発信するように館員に促していきたいと思ひます。

5 マーケティング・マネジメント

企画調整室

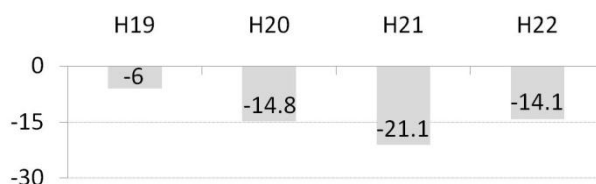
効率的で健全な博物館運営を目指します。

5-3 二酸化炭素排出量の削減

対平成 18 年度比での削減率

年度目標：-6%(H18 年度比)

平成 22 年度：-14.1%

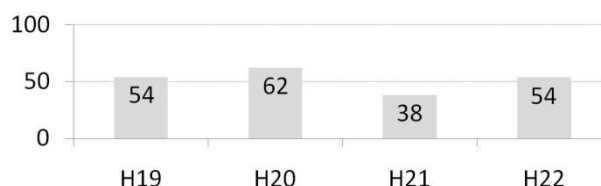


5-4 中期目標の達成度

中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合

年度目標：80%

平成 22 年度：54%



平成 22 年度の取組みについて

第 2 期中期目標の 4 年目の年度です。継続して行っている事業を通じて多くの方に博物館の活動を知っていただくのはもちろんですが、特に、協力協定を締結した自治体や施設との連携を進めて行くことで、それぞれの地域の方々に知っていただく努力をし、地域の方々の協力のもとにメディアにも取り上げていただくようにしました。

平成 22 年度の達成状況と自己評価

電気、水道、ガスの使用量から算出する二酸化炭素排出量は、前年度よりも削減が進まず一昨年度と同程度でした。また中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合（達成度）は 54%であり、前年度よりも高くなりましたが、年度目標には到達できませんでした。中でも「資料の利活用件数」、「ビジター数（総利用者数）」、「来館団体数」、「ホームページアクセス件数」などは低調であったため、特に対策が必要だと考えています。

平成 23 年度の取組に向けて

来年度は、第 2 期中期目標の最終年度となると同時に、開館 20 周年（平成 24 年度）を迎える前年度となります。今期の目標値および第 2 期中期目標（5 年間）の達成に向けての対策の検討だけでなく、次期の中期目標の策定および開館 20 周年という節目に向けて、様々な博物館活動の見直しが必要だと考えています。